

大学生の授業外学習時間の再検討

中島 ゆり

長崎大学大学教育イノベーションセンター

Review of College Student Study Time

Yuri NAKAJIMA

Center for Educational Innovation, Nagasaki University

Abstract

This paper aims to review college student study time. Study time is one of the significant variables to understand how well each college manages its curriculum. Colleges conduct student survey and measure how much time students spend on homework or assignments each week, often employing categorized measurement scales. Scholars point out that Japanese students do not study as much as the US students do. Japanese governments demand each college to make students study at least two hours outside classroom by one credit. In this manner, measuring precise study time becomes more important for college educational management. However, categorized measurement scales cannot capture precise time as each category has a particular time span (for example, 3 to 5 hours). This study examines how much precisely study time is measured by categorized scales. For comparison, this study conducted study time through the students' records of daily life including study. Compared with the difference in outcomes conducted both by measurement scales and the records of daily life, this study finds that there are large differences in both study times. In addition, this study explores what students study outside classroom, and finds that students do not only homework and "narrow-sense" study, but also some try to obtain competencies through part-time work, club activities, and so on. To conclude, I suggest that using measurement scales is not necessarily relevant to the measurement of precise study time, and that we need to discuss what students should learn outside classroom in consideration of the need of competency development.

Key Words : College Students, Study Time, Student Survey, Competency, Institutional Research

1. はじめに

本稿では、大学生の授業外学習時間を測定する必要に鑑み、これまでの選択肢選択による測定方法の妥当性と自主学習の内容について検討する。

アメリカの大学生に比べ、日本の学生の学習時間が相対的に少ないという指摘がある。谷村・金子（2009）によれば、日本の1年生（文系）の授

業外学修時間は8.9時間（授業関連学修+自主的学修時間）であるのに対し、アメリカの学生は13.3時間である（授業関連学修時間）¹⁾。政府は大学の単位の実質化のために授業外学習時間を増やすことを求めており、教育再生実行会議（2013）は全学的教学マネジメントの改善として「授業の事前準備や事後展開を含めた学生の学修時間の確

保・増加」を掲げている²⁾。文部科学省が平成26年度から実施している「大学教育再生加速プログラム(AP)」の「テーマII 学修成果の可視化」では、申請校に対し「補助期間内において学生の授業外学習時間が増加するものであるか」を求め、1週間当たり(時間)の指標とその測定方法を記載することを要求している。このように大学の教育改革の動きにおいては、学生の学習時間とその伸長状況を正確に測ることが求められているのである。

これまで授業外学習時間は選択肢形式によって典型的な1週間の平均的な学習時間を測定されることが多かった。たとえば、2007年に東京大学大学経営・政策研究センターが実施した「全国大学生調査」では、「典型的な1週間の平均的な生活時間を、学期中と休暇中の別に教えてください」という質問によって、「授業・実験への出席」、「授業・実験の課題」、「準備・復習」、「卒業研究・実験・卒論(該当者のみ)」、「授業とは関係のない学習」、「サークル・クラブ活動」、「アルバイト・仕事」についてそれぞれ尋ねている。選択肢のカテゴリーは「0時間」、「1-5時間」、「6-10時間」、「11-15時間」、「16-20時間」、「21-25時間」、「26-30時間」、「31時間以上」を用いている。2014年の国立教育政策研究所の「大学生の学習状況に関する調査」では「今学期中の典型的な1週間について、平均的な生活時間を教えてください」という聞き方で、「大学の授業」、「大学の授業の予習・復習」、「卒業論文・卒業研究」、「大学の授業以外の学習」、「部活動・サークル活動」、「アルバイト・定職」、「就職活動」、「娯楽・交友」について尋ねている。選択肢のカテゴリーは上記の「全国大学生調査」と同じである。また、大学IRコンソーシアム¹⁾が実施している「学生調査」では「週あたりの活動時間」を「授業や実験に出る」、「授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする」、「授業時間外に、授業に関連しない勉強をする」、「オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する」、「部活動や同好会に参加する」、「大学外でアルバイトや仕事をする」、「読書をする(マンガ・雑誌を除く)」、「個人的な趣味活動をする(テレビやゲーム、映画鑑賞など)」についてそれぞ

れ訪ねている。選択肢は「全然ない」、「1時間未満」、「1-2時間」、「3-5時間」、「6-10時間」、「11-15時間」、「16-20時間」、「20時間以上」を用いている。

いずれの調査でも学習時間については大きく分けると大学の授業、授業に関連する学習、授業とは関係ない自主学習の3つを含んでおり、典型的な1週間(あるいは指定しない1週間)の学習時間を選択肢を用いて回顧的に尋ねる設計になっている。この調査結果から平均学習時間等を算出する場合には、カテゴリーの中間値をとって計算される。

よく用いられる方法であるこれらの選択肢による測定には問題もある。まず、選択肢カテゴリーに幅があるため正確な学習時間とその伸長は測れない。たとえば、授業外に週に3時間学習していた学生が5時間勉強するようになっても「3-5時間」の選択肢カテゴリーでは同じになってしまう。

選択肢選択については、選択肢を学生が正しく選択できているかという疑問もある。両角(2009)は偏差値や設置者といった大学特性と授業外学習時間には関係がないことを指摘しているが³⁾、長崎大学も加盟している大学IRコンソーシアム学生調査の結果を見ても、全国の大学間で学習時間に大きな差がない。2015年度の大学IRコンソーシアム学生調査の結果を見ると、「授業や実験に出る」時間は全国平均で16.2時間、長崎大学では16.6時間、「授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする」時間は全国平均で4.2時間、長崎大学は4.6時間、「授業時間外に、授業に関連しない勉強をする」時間は全国平均で1.6時間、長崎大学は1.5時間であり、大きな差がない。さらに、経年変化を見ても、年度によってほとんど差がない。

このように差がさほど見られないのは、各大学のカリキュラムにも努力にもあまり違いがなく、全国の大学生がほぼ同じような学生生活を送っているからであろうか。それとも、回顧的に典型的な1週間の学習時間を聞かれた学生がイメージする学習時間が同じだからであろうか。本研究では、この推測に対する答えを明らかにすることはできないが、選択肢による学生の学習時間と、それ以外の方法による測定方法とで、結果が異なるか否

かについて検討し、選択肢選択の妥当性について考察する。

これまでの選択肢選択による測定のもう一つの問題は、授業に関連しない自主学習の内容が何かということについて、ほとんどの場合、定義されていないということである。自主学習とは、一般には、専門的な文献の読書、語学や就職試験のための勉強など、机に向かっての学習時間を想定していると推測する。しかし、回答する学生がそれを共有しているかについては明らかではない。とくに、近年、社会人基礎力などのコンピテンシーを大学で育成することが要請されつつあるが⁴⁾、これらの能力を伸ばすことを目的に行動している学生もいるだろうと予想できる。本研究では、学生が何を自主学習と捉えているか、コンピテンシーの育成を試みている学生はいるかについても検討する。

本研究では、以上の課題を検討するため、学習時間を生活時間記録の形式で測定し、また、自主学習の内容について記述してもらったパイロット調査を実施することにした。

2. 学習時間パイロット調査の概要

本研究では、生活時間記録の形式で1週間、毎日、学習時間を含めた一日の生活記録を記入してもらったパイロット調査を実施した。調査は2015年12月2日(水)～8日(火)に、長崎大学の教職課程「教育方法・技術論」(後期、水曜日、5限)の受講生を対象に実施した。対象者の所属は工学部33人、水産学部14人、経済学部9人、多文化社会学部3人で、男性44人、女性15人であった。その多くが1年生で2～4年生は若干名のみであった。

本パイロット調査の方法を具体的に述べる。12月2日(水)の授業の場を借り、1週間分のA3調査票5枚(調査概要1枚と1枚2日分の記録用紙4枚)を配付し、調査概要を説明した。調査票は図1の通りである。

調査票は持ち返ってもらい、朝起きてから寝るまでの一日の行動とその時刻について、一週間、毎日記入してもらった。このような生活時間記録の形式をとったのは、一日の中のちょっとした時

間における学習も思い出して記入してもらうためである。

図1 調査票

行動のうち、学習に関するものについては「学習カテゴリー」と学習時間(分)についても記入してもらった。表1に示したように、学習カテゴリーは「A. 大学の授業」、「B. 授業に関連する学習、課題、試験勉強、予習・復習など」、「C. 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動」の3つの大分類であり、それぞれをさらに3つずつの小分類に区分し、計9分類とした。それぞれのカテゴリーの2を「外国語科目」としたのは、授業外学習時間において語学の占める割合が多いと予想されたためである。

表1 パイロット調査における学習カテゴリー

カテゴリーA 大学の授業
A1 教養科目(モジュール科目・健康スポーツ科目・教養セミナーなど)
A2 外国語科目(教養・専門を問わない)
A3 専門科目
カテゴリーB 授業に関連する学習(課題、試験勉強、予習・復習など)
B1 教養科目(モジュール科目・健康スポーツ科目・教養セミナーなど)
B2 外国語科目(教養・専門を問わない)
B3 専門科目
カテゴリーC 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動
C1 就職試験、公務員・教員試験、国家資格試験等の勉強、編入・進学のための勉強
C2 外国語に関連する勉強
C3 その他

さらに、Cの自主学習のうちC3(その他)については、「詳細な活動の内容」と「学ぼうとしていること・身につけようとしている能力」を具体的に記述してもらった。学生にはコンピテンシーの育成も学習としてカウントしてもらいたい旨を伝え、その記入を促した。具体的には、表2の説明を調査概要に含めた。

表2 パイロット調査における学習の定義

今回対象とする「学習」とは、授業と授業に関連する学習のほか、以下のようなものも含まれます。

たとえば・・・

- ・電車の中で英語のリスニングをする
- ・ご飯を食べながら単語帳で単語を覚える
- ・就職試験対策の勉強をする
- ・外国語を身につけることを目的としてYouTubeを見たり洋楽を聞いたりする
- ・歴史を学ぶために本を読む
- ・社会情勢を学ぶために新聞を読む
- ・コミュニケーション能力を高めるために接客のアルバイトをする etc.

つまり、「何かを学ぶこと」を主な目的としておこなっている活動のことです！

ですので、結果として何かを学んだとしても、その学びを目的としていなかった活動については含まれません。

たとえば・・・

- × テレビを見ていたら思いがけず知らなかった外国のことを学んだ
- × サークル活動をしていたらコミュニケーション能力が高まったと感じた

といったようなものは入りません。同じサークル活動でも、コミュニケーション能力を高めようとして参加を決めたサークル活動の場合には学習に入ります。

調査票の書き方例も図2の通り調査概要の中に含めて配付した。

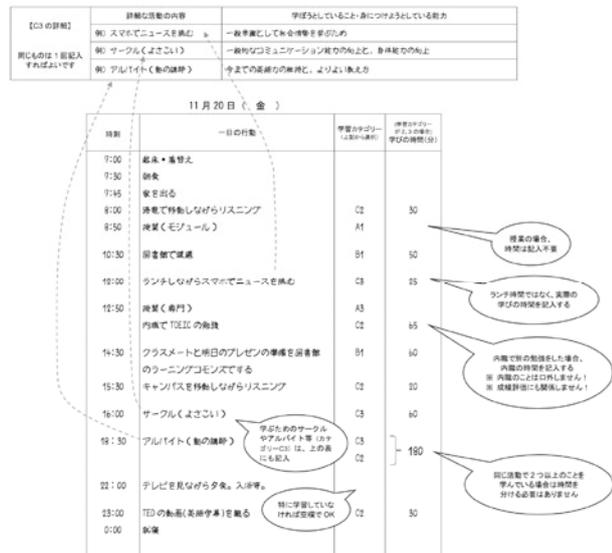


図2 提示したパイロット調査の書き方例

3. 選択肢選択と生活時間記録による測定結果の比較

本研究ではパイロット調査として実施した生活時間記録による学習時間と選択肢選択によって測定した学習時間を比較する。本パイロット調査を実施したほぼ同時期に大学 IR コンソーシアム学生調査を1年生と3年生に対し悉皆で実施しているため、選択肢による測定については、この学生調査の結果を用いる。以下の分析では、両調査の対象者で、かつ、データを接続して分析することに同意した43人(1年生41人、3年生2人)の回答について、比較検討する。

3.1. 代表値のずれ

表3は選択肢による測定の結果、表4は生活時間記録による測定の結果を示している。選択肢による測定については、カテゴリーの中間値をそのカテゴリーの値として計算した。

表3 選択肢によって測定した学習時間(分)

	A 授業や実験に出る	B 授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする	C 授業時間外に、授業に関連しない勉強をする
平均値	1007	267	80
中央値	1080	240	30
最大値	1200	780	480
最小値	30	0	0

注)「全然ない」=0分、「1時間未満」=30分、「1~2時間」=90分、「3~5時間」=240分、「6~10時間」=480分、「11~15時間」=780分、「16~20時間」=1080分、「20時間以上」=1200分として計算。

表4 生活時間記録によって測定した学習時間(分)

	カテゴリーA 大学の授業	カテゴリーB 授業に関連する学習	カテゴリーC 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動	カテゴリーC1+C2 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動
平均値	1189	587	493	85
中央値	1170	560	300	0
最大値	2070	2130	2045	910
最小値	180	0	0	0

まず、授業時間について、選択肢での測定による平均値、中央値、最大値、最小値を見てみよう。

「A. 授業や実験に出る」の平均値は1007分(16.8時間、90分授業11.2コマ換算)、中央値は1080分(18.0時間、90分授業12.0コマ換算)、最大値は1200分(20.0時間、90分授業13.3コマ換算)、最小値は30分(0.5時間)であった。つぎに、生活時間記録で測定した「A. 大学の授業」の平均値は1189分(19.8時間、90分授業13.2コマ換算)、

中央値は 1170 分 (19.5 時間、90 分授業 13.0 コマ換算)、最大値は 2070 分 (34.5 時間、90 分授業 23.0 コマ換算)、最小値は 180 分 (3.0 時間、90 分授業 2.0 コマ換算) であった。両調査を比較すると、授業コマ数にして平均では 2 コマ、中央値で 1 コマの差があり、両方とも生活時間記録で測定した方がコマ数が多くなっていた。

つぎに授業に関連する学習時間について見てみよう。選択肢での測定による「B. 授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする」時間の平均値は 267 分 (4.5 時間)、中央値は 240 分 (4.0 時間)、最大値は 780 分 (13.0 時間)、最小値は 0 分であった。つぎに生活時間記録による「B. 授業に関連する学習」の平均値は 587 分 (9.8 時間)、中央値は 560 分 (9.3 時間)、最大値は 2130 分 (35.5 時間)、最小値は 0 分であった。両者を比較すると、時間がかなり異なっていた。平均値、中央値ともに 5.3 時間の差があり、生活時間記録による測定の方が時間が長くなっていた。この点について、授業時間と同様の傾向であった。

授業には関連しない自主学習について見ると、選択肢での測定による「C. 授業時間外に、授業に関連しない勉強をする」時間の平均値は 80 分 (1.3 時間)、中央値は 30 分 (0.5 時間)、最大値は 480 分 (8.0 時間)、最小値は 0 分であった。それに対し、生活時間記録による「C. 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動」による平均値は 493 分 (8.2 時間)、中央値は 300 分 (5.0 時間)、最大値は 2045 分 (34.1 時間)、最小値は 0 分であった。両調査の差は非常に大きく、平均値では 6.9 時間、中央値では 4.5 時間の差があった。

ただし、C3 の「その他」には多くの者がイメージするであろう机上の学習時間以外の「学習」が含まれているため、狭義の学習 (C1 と C2) に限定して計算したものも示す。C1+C2 の平均値は 85 分 (1.4 時間)、中央値は 0 分、最大値は 910 分 (15.2 時間)、最小値は 0 分であった。この結果と選択肢による測定との差はさほど小さくなく、平均値で 0.1 時間、中央値で 0.5 時間の差にすぎなかった。平均値では生活時間記録による測定の方が時間が長かったが、中央値では反対に選択肢による

測定の方が時間が長くなっていた。

以上のように、質問紙調査と生活時間記録での平均値を比較すると、狭義の自主学習時間以外では生活時間記録の方が書かれている時間が長い傾向にあった。

3.2. 調査問のずれについての詳細な検討

この両調査における回答のずれにより、回答者個人内でいったいどれくらいの時間の差が生じるのかを生活時間記録を基盤にして、より細かく見たものが表 5 である。選択肢による測定においてカテゴリ内に生活時間調査での回答が収まっている場合には「ずれがない」、そのカテゴリから外れている場合には「ずれがある」ものとしてカウントした。

表 5 生活時間記録と選択肢選択とのずれ

	カテゴリ-A 大学の授業	カテゴリ-B 授業に関連する学習	カテゴリ-C 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動	カテゴリ-C1+C2 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動
ずれのなかった回答数と%	21 48.8%	10 23.3%	10 23.3%	17 39.5%
ずれの平均値	453.2	533.3	590.9	154.9
ずれの中央値	390	360	380	0
ずれの最大値	1110	1890	1985	490
ずれの最小値	30	60	60	30

注) 平均値、中央値、最大値、最小値は、ずれの絶対値で計算。

まず、ずれの見られなかった回答の割合は「A. 大学の授業」で 48.8%、「B. 授業に関連する学習」で 23.3%、「C. 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとして行った活動」では 23.3%、C1+C2 に限定すると 39.5% であった。大学の授業という学期内でほぼ固定しているはずの学習時間についても過半数にずれが見られた。「C」については C1+C2 の方がずれしていない人数が多かったことから、学習時間と言われると狭義の学習をイメージする学生が多いだろうことが推測できる。

つぎに、両調査で回答者個人内でどのくらいの時間のずれがあるのかの詳細を見た。ここでのずれは選択されている選択肢カテゴリの中間値と生活時間記録での回答との差の絶対値を計算したものである。まず、「A. 大学の授業」時間のずれは、平均 453.2 分 (7.6 時間)、中央値 390 分 (6.5 時間)、最大値 1110 分 (18.5 時間)、最小値 30 分 (0.5 時間) であった。1 授業 90 分として計算す

ると、同じ学期内での調査であるにもかかわらず、平均値で5コマ、中央値で4コマ分のずれが見られる。「B. 授業に関連する学習」のずれは平均533.3時間(8.9時間)、中央値360分(6.0時間)、最大値1890分(31.5時間)、最小値80分(1.3時間)であった。「C. 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動」時間のずれは平均590.9分(9.8時間)、中央値380分(6.3時間)、最大値1985分(33.1時間)、最小値80分(1.3時間)であった。C1+C2のみに限定すると、平均154.9分(2.6時間)、中央値0分、最大値490分(8.2時間)、最小値30分(0.5時間)のずれが見られた。

つぎに選択肢と生活時間記録のずれている方向についての検討である(表6)。選択肢選択で多く見積もっているケースが多いのか、それとも少なく見積もっているケースが多いのか。「A. 大学の授業」については多く見積もっているケースと少なく見積もっているケースが同数であったが、「B. 授業に関連する学習」については選択肢の方を少なく見積もっているケースが圧倒的に多かった(33人中26人)。同様に「C. 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動」についても、選択肢の方を少なく見積もっているケースが多かった(33人中25人)。ただし、C1+C2に限定すると選択肢の方を多く見積もっている者が多くなる(26人中21人)。このことから推測できるのは、授業に関連する学習については学生自身がイメージしているよりも実際は長く学習している可能性が高いが、狭義の自主学習については実際の学習時間は短い可能性が高いということである。

表6 ずれの方向(度数)

		カテゴリ-A 大学の授業	カテゴリ-B 授業に関連する 学習	カテゴリ-C 授業に直接関連し ないもので、何か を学ぼうとしてお こなった活動	カテゴリ-C1+C2 授業に直接関連 しないもので、何か を学ぼうとしてお こなった活動
選択肢選 択のほう が時間	多く見積もっている	11	7	8	21
	少なく見積もっている	11	26	25	5
合計		22	33	33	26

このずれがなぜ生じてしまうのかの理由はいくつか考えられるが、一つは学生が選択肢を選ぶ場合に1週間の学習時間を特別計算せず、概算で選んでいることが推測できる。とくに授業時間のず

れが平均5コマであることについては学生が不正確に回答している証左であるように見える。生活時間記録をとった週に授業が休講であったり、集中講義の授業があったりした可能性もあるが、平均5コマのずれが生じるとは考えにくい。

これに対し、生活時間記録を行った週にたまたま授業外学習時間が多かった/少なかったため、典型的な1週間について尋ねる選択肢選択での測定との間にずれが生じる可能性は十分ある。たとえば、「B. 授業に関連する学習」についての内容として、中間テストに向けた専門の勉強、専門の再試験のための勉強といった試験関係があげられているケースがそれである。授業課題についても、生活時間記録の週にたまたま課題が多く出されたということもあり得るが、この調査ではそこまでは明らかにはならなかった。

つぎに、選択肢選択と生活時間記録の回答がずれているケースについて、選択肢カテゴリとしてはいくつずれが生じているかを表7で確認する。

表7 選択肢カテゴリとのずれ(度数)

		カテゴリ-A 大学の授業	カテゴリ-B 授業に関連する 学習	カテゴリ-C 授業に直接関連 しないもので、何か を学ぼうとしてお こなった活動	カテゴリ-C1+C2 授業に直接関連 しないもので、何か を学ぼうとしてお こなった活動
選択肢カ テゴリ とのずれ	1段階	11	12	6	12
	2段階	6	5	10	10
	3段階	1	12	4	2
	4段階	3	4	4	2
	5段階	1	0	3	0
	6段階	0	0	6	0
合計		22	33	33	26

まず「A. 大学の授業」については22人中半数が1段階のずれであり、つぎに多いのが2段階のずれで6人であった。少数ではあるが、4段階、5段階のずれも見られた。1段階のずれと言っても30分から390分(6.5時間)の違いがあるケースがある。つぎに「B. 授業に関連する学習」については、33人中、1段階と3段階のずれが12人、2段階が5人、4段階が4人であった。「C. 授業に直接関連しないもので、何かを学ぼうとしておこなった活動」については、33人中2段階のずれが10人と最も多く、5名程度ずつがその他の段階でずれていた。C1+C2に限定すると、26人中1段階

のずれが 12 人、2 段階が 10 人、3 段階と 4 段階のずれが 2 人ずついた。

先に述べたように、生活時間記録の週が非典型的な 1 週間であれば、選択肢カテゴリーがずれてしまうことはあり得ることである。しかしながら、ずれが見られた回答のうちの半数が 2 段階以上もずれていたことを鑑みると、学生が選択肢選択を正確に行っていない可能性についても検討すべきであろう。

4. 授業外学習の内容

本節では、生活時間記録で記述してもらった、C の授業外での自主学習の内容について見ていく。

まず、C1 の試験関係と C2 の語学関係に限定して学習内容を見てみると、車や電車の中でのリスニング、TOEIC などの自主学習、語学学習のための映画・洋楽鑑賞、PC 検定準 2 級取得のための PC の勉強というものがあげられていた。これらは、たまたま生活時間記録をとった週にのみ行ったのかは明らかではない。ただ、3 節で見たように、C1+C2 については、選択肢選択による測定と生活時間記録による測定との間に大差はない。おそらく、多くの学生の自主学習の時間がそもそも短いため、選択肢を用いても自分の学習時間を正確に選択できるのかもしれない。

つぎに、C3 を見ると、来年の授業に向けた対策、英語・有機化学の勉強、アルバイト面接に実施されるテストに備えた勉強といった、狭義の学習についても書かれていたが、メディア観賞、アルバイト、サークル・部活、自動車学校、読書を学習としてあげる者もいた (表 8)。

表 8 C3 の内容

C3の内容	N
メディア	26
アルバイト	22
サークル・部活	21
自主勉強	7
自動車学校	7
読書	3
その他	13
無回答	6
合計	105

注) 合計の値は C3 カテゴリーに分類した行動の数。

これらの行動で何が身につくと学生は考えているかという、「メディア関係 (テレビ、インターネット、スマートフォン、洋楽)」は、ニュースの視聴によって社会情勢を学ぶ、ネットユーザーの意見・世論を学ぶ、日本の学校関連の事件・事故を知る、今の教育現場の状況について学ぶ、外国語に耳を慣らす、音楽的才能の向上、一般的な医療の知識を身につける、「アルバイト関係」は、コミュニケーション能力、社会経験・社会性、接客力、自分で稼ぎ生活していく能力、塾や家庭教師のアルバイトについては、中・高校範囲の復習、英語力の維持、教え方、将来に向けた授業計画、「サークル・部活関係」は、体力の向上、コミュニケーション能力、文化を学ぶ・教養、音楽的才能の向上、演奏技術の向上、統率力、美術力、計画する力、問題解決能力、人間関係を構築する力、知識、といったことがあげられた。また、「自動車学校」は当然のことながら自動車の運転技術、「読書」は考え方、思考力、いじめについて学ぶ、コミュニケーション能力について学ぶ、といったことが身につく能力としてあげられていた。

以上に加え、少数の行動として、「洗濯」(身の回りのことを自分でし、自立する能力)、「発表のリハーサル」(コミュニケーション能力・情報収集能力)、「ダイビング」(海について興味を持ったり、実際に見ることで学ぶ)、「ランニング・筋トレ」(健康な体作り)、「友達とカラオケ」(歌唱力、人前で歌うことへの慣れ)、「T シャツのデザイン作り」(ソフトを使う力・美術力)、「バーで会話」(一般的なコミュニケーション力、カクテルの知識(教養))、「自動車学校」(運転技能と交通ルールを学ぶ)といった項目もあがった。

狭義の学習以外のことを「学習」として定義し、これを授業外学習時間として測定することについては議論があるところであると思われるが、一つ言えることは、これまで把握されてこなかった狭義の自主学習時間以外にも学生は何かしらコンピテンシーにかかる事柄を学ぼうとしている可能性があるということである。

5. まとめと考察

本稿では、典型的な1週間の学習時間について回顧的に選択肢を選択してもらう測定方法で得られた学習時間と、ある特定の1週間について、生活時間記録によって細かく行動を記録してもらう測定方法で得られた学習時間を比較し、そのずれについて検討した。その結果、同じ時期の同じ学生の結果であるにも関わらず、得られた値が大きく異なり、とくに授業に関する授業外学習時間について生活時間記録の方が学習時間が長い傾向にあることが分かった。

その理由として、調査を実施した、その特定の1週間にたまたま学習時間が長くなったという理由が考えられる。生活時間記録に書かれた学習内容の中で試験勉強をしたというケースはそれにあてはまるだろう。ただし、多くの授業外学習時間の内容は授業課題であった。たまたまその週に授業課題が多かったということももちろん考えられるが、授業時間についても小さくないずれがあることを鑑みると、やはり選択肢選択での学生の回答が正確でない可能性について否定できない。

ここからはあくまで推測にすぎないが、毎日、記録してもらうと、短時間の学習時間まで思い出してもらえ、そのような細かな学習時間を足し合わせると学生の想定よりも長くなるのではないだろうか。選択肢選択では1週間の授業時間はこれくらいだろうという目安で回答する。しかし、実際は学生は自分で考えている以上に学習に時間を費やしているのである。

狭義の自主学習時間については、選択肢選択の結果と生活時間記録の結果にあまり差が見られなかったが、そもそもの時間が短く、足し合わせるまでもない時間については、選択肢選択によっても正確に回答できるものと考えられる。

このように短時間の学習時間は学習としては不十分であるという意見もあるかもしれない。ただ、学生の一日の行動を見ると、まとまった学習時間がとりにくいカリキュラムであることも事実である。今後、クォーター制へ移行によって学生の学習行動は変化するかもしれない。引き続き、調査が必要である。

つぎに、自主学習の内容について検討したとこ

ろ、コンピテンシーの育成を目的に行動している学生も少なからずいることが分かった。メディア観賞、アルバイト、サークル・部活、自動車学校、読書に加え、「洗濯」や「バーで会話」といったことなども、学生の記述を見ると、ある程度の説得力をもった能力を育成するための行動として捉え得る。ただし、これらのコンピテンシーは、学生があえて意図して行動しなくても、行動することでいつのまにか伸長することの方が実際には多いだろう。これらを「学習時間」として測定することは難しいし、さほど意味のあることとも思えない。重要なのは、狭義の学習時間以外にも学生は何かを学んでいるという可能性を忘れないことである。大学教育においてコンピテンシーの伸長を重視し始めた現在、この点についても議論を深めていく必要がある。

最後に、生活時間記録を用いた学習時間の記録による測定方法の課題として、特定の1週間を設定することで、試験の有無等によって学習時間が大きく異なってしまう可能性があること、実査においては、1週間毎日学生に調査に協力してもらわなければならない、学生の負担が大きいことがあげられる。パイロット調査で調査方法に対する意見を聞いたところ、「ほぼ毎日記入した」学生は19.2%に過ぎず、「1週間分まとめて記入した」学生は42.3%であった。このため、もう少し工夫をしなければ、毎日の記録が必ずしも正確にとれないことも分かった。その他、9分類の学習カテゴリーが細かく、記入が面倒であったという意見やA3で作成した記録用紙が大きすぎ、持ち歩きにくいので記録しにくいという意見もあった。以上のように生活時間記録によって学習時間を測定する場合にもいくつか課題があることが明らかとなったため、実際の調査においてはこれらの課題を解決する方策が求められる²。

注

1. 大学IRコンソーシアムは同志社大学、関西学院大学、甲南大学、北海道大学の4大学を中心とした共通の学生調査を行うことでベンチマークを目指す全国ネットワークである。平成28年度には49大学が加盟している。長崎大学は平成24

年度に加盟し、1年に一度、1年生と3年生に対する悉皆調査を実施してきた。

2. これらのパイロット調査での課題を踏まえ、2016年度には1、2年生対象の生活時間記録をウェブで実施した。学習カテゴリーは大分類の3つのみに限定した。学生は履修している教養のモジュールのテーマ、所属学部、成績による層化抽出で選び、協力依頼を行った。

参考文献

- 1) 谷村英洋, 金子元久 (2009) “資料 学習時間の日米比較”, IDE 現代の高等教育, No. 515, pp. 61.
 - 2) 教育再生実行会議 (2013) “これからの大学教育等の在り方について (第三次提言)”
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/teigen.html> (2017年1月14日に参照)
 - 3) 両角亜希子 (2009) “学習行動と大学の個性”, IDE 現代の高等教育, No. 515, pp. 26-31.
 - 4) 松下佳代編著 (2010) <新しい能力>は教育を変えるか——学力・リテラシー・コンピテンシー, ミネルヴァ書房.
- ※ 本稿は2016年6月に追手門学院大学で開催された日本高等教育学会第19回大会 (自由研究発表II-7部会) での報告原稿に加筆修正したものである。発表に対して頂いたご意見に感謝申し上げます。
- ※ 本調査研究は長崎大学「大学教育再生加速プログラム (AP事業)」の一環として実施している。